

## 巻頭言

## 会長退任の挨拶



伊福部 達

東京大学

会長の役割は何なのかという明確な答えを見いだせないまま、また、廣瀬前会長の甘い言葉に乗せられたまま、任期の2年間で終わりました。その間、有能な副会長の各氏に支えられながら、各担当理事は、それぞれの委員会を通じて担当分野を纏めてくれましたし、事務局の皆様は縁の下の力持ちになって、委員会の難しい要望に応え、各イベントを成功させるのに貢献してくれました。そして主役である学会員は、各自の研究成果やアート系の魅力的な発表で学会を盛り上げ、VRを一層発展させてくれました。改めて皆様に感謝の意を表すとともに、特別講演の話などを基に私の会長就任挨拶で述べた「思い」がどこまで伝わったのかを振り返って考えてみます。

\*\*\*\*\*

第17回の大会では齋藤先生が大会長となって、慶応大学で開かれました。猛烈な残暑の中、ガラス張りの会場内では外の熱気と学会発表の熱気に包まれ、北国生まれの私はサウナにいるような感じでした。基調講演ではVR学会の初代会長の舘先生が「VRとテレグジスタンスの原点回帰」の話をされました。その中で、20年前に私共が務めた人工現実感プロジェクトを引用され「VRは世の中の関係という視点を堅持しながら研究開発を進めていく」ことが当時の重要な使命であったと強調されました。また、講演後に私が「VRを道具として人間を知り、そこから新しいVRを作って人間に役立てるというのを繰り返して進歩させる方法論」について発言したところ「まさに、その通り」と答えられました。これらのことはVRのミッションや方法論としていつまでも受け継いで欲しいと思いました。

招待講演ではチームラボ代表の猪子寿人さんが「そう、文化は、長い歴史の中で、非言語に、そして、無自覚に、連続しながら、新たなものを生んでいく」というタイトルで日本画などを例にとり、日本の伝統的な空間認識の原点に触れました。このような若い人たちの感性はVRでも大事にしていきたいものです。

なお、12年度の京都賞ではVRの始祖の一人であるアイバン・サザランド教授が受賞されましたが、このことはVRが国際的に評価されたことの現れと思います。私は会長という立場で授賞式に招待され、燕尾服で出席せよとのことで、慌てて衣装レンタル会社に飛び込んで高い金で服を調達し、やっと式に間に合いました。サザランド先生の時代まで原点回帰するには金がかかるものだと思つづく感じました。

\*\*\*\*\*

第18回大会は竹村先生が大会長となって、4月にオープンしたばかりの大阪の「グランフロント大阪」で開催されました。その場所の獲得に色々な裏工作があったとしても、大会長が自ら「VR街に出る」を実現して下さったことは一歩前進です。そこの「ナレッジキャピタル」で開かれた企業展示も盛会で、IVRCのデモ・展示では一般公開を通じて「街の人、VRに来る」を実現してくれました。参加登録者数も500名を超え、過去最大の大会になりました。

特別講演ではモバイル&ゲームスタジオ社の遠藤雅伸様が1980年台におけるTVゲームの開発奮闘記をお話し下さり、当時としては画期的なZ80 CPUを使った件（くだり）などは私共にとっては涙が出るほど懐かしいものでした。私の会長就任の挨拶で「時には『温故知新』

も大切」と書きましたが、まさにその思いのひとつが実りました。

もうひとつの講演は大阪大学の河崎善一郎名誉教授による「雷鳴と電光」の研究裏話でしたが、先生は物理学会ならともかくも VR 学会での講演は場違いなのではと悩んだそうです。私の就任挨拶で「『VR と X』という形で、『X』として関係のなさそうな分野を当てはめ、それらの分野を結びつける『ハブ』の役割を果たすことで、VR は限りなく広がる」と書きましたが、「VR と雷」にも私の思いが十分に伝わりました。

なお、ついでといっは失礼になりますが、文化・芸術で ASIAGRAPH を牽引されている河口先生が紫綬褒章という荣誉ある賞をとられ、私どもにはこの上ない誇りとなりました。授賞式には会長として招待されましたが、いきなり本人が仕切る「お祭り」と化し、サザランド先生の時とはずいぶん趣が異なりました。

\*\*\*

学会誌や論文誌の特集でも「VR と X」の X として「美容」「文化施設」「宇宙」「食」「脳機能」「医療・福祉」と X 探しに奔走していただきました。

企画では「学生の学生による学生のための」VR コンテスト IVRC が 20 周年を迎え、その節目として「20 年史」が刊行されました。とくに大会中に開かれた岩田先生による審査と発表はさながらアカデミー賞の発表会のような雰囲気でした。IVRC は奇想天外なアイデアを発表できる場としてこれからも若い人を惹きつけ、VR にも大きく貢献して欲しいと思います。

VR 技術者認定については IVRC と連動した形を試み、さらに思いっきり受講料を軽くしたところ、参加者を大幅に増やすことができました。

文化・芸術では、恒例の文化フォーラムが相澤先生の努力により河口先生のお膝元の鹿児島で開かれました。桜島を舞台とする企画では縄文時代に噴火で埋もれた集

落を訪ねたり、また東大の池内先生による文化遺産をデジタルモデルとして残す e-Heritage プロジェクトの講演があったりして、極めて格調高いフォーラムになりました。私は「縄文の響き、平成の響き」と題して、「縄文とアイヌ」から「ゴジラ音楽と地震速報チャイム」ができるまでを強引に結び付ける怪しげな話をしました。また、ASIAGRAPH がハワイ大学で開かれ、ハワイ島の見学は大変好評でした。ただ、参加者が恒常化してきたり、フォーラムに相応しい場所を毎年探すのは大変なことから、次回からそのあり方を見直すことにしました。

なお、会長であった証を残すために研究委員会の一つに「超高齢社会の VR 活用研究委員会」を退任間際になって加えました。これは私のマニフェストである「高齢社会に VR を生かす」を実現したかったからですが、次世代への宿題としたいと思います。また、これに関連した訳ではないのですが「正会員として 15 年間を経過した 65 歳以上の者を上級会員とする」制度を作り、色々な優遇策を設けました。

\*\*\*

最後に、会長の立場で考えさせられたことを少し述べます。学会は営利が目的ではないのですが、経営的な面も重要になってきていると感じました。とくに、賛助会員にとって具体的なメリットが得られるように配慮し、産業界からの協力がもっと得られるように工夫することが求められています。そのためには事務局側からの要望や問題点の吸い上げ方も重要になり、指示系統がしっかりとした事務規約を作って事務局に仕事をしやすくすることが重要と思いました。

会長の役割が少し見えてきて、同時に改善すべき課題も見えてきました。次期の榎並和雅会長の下、VR の魅力を発信し続けながら、また前向きに改善しながら、ますます発展していくことを心から祈っています。

【略歴】

伊福部 達 (IFUKUBE Tohru)

東京大学 名誉教授 (高齢社会総合研究機構)

1971 年北海道大学修士課程 (電子工学) 修了後、北海道大学・応用電気研究所・助手、1989 年北大・電子科学研究所教授、2002 年東京大学・先端科学技術研究センター・教授を経て、2011 年より現職。工学博士。この間、福祉工学の開拓と産業応用の研究に従事。北大名誉教授、東大名誉教授、2001 年電子情報通信学会フェロー、日本バーチャルリアリティ学会フェロー。著書に「音声タイプライタの設計」(CQ 出版 1983)、「音の福祉工学」(コロナ社、1997)、「人工現実感の評価」(編著、培風館、2000)、「福祉工学の挑戦」(中公新書、2004)、「ゴジラ音楽と緊急地震速報」(監修、ヤマハミュージックメディア、2012) など。